

WG審議の方向性

- AIは危ないから何か規制しないといけないみたいな、そういう議論になっていかないようにしたい
- データ収集をしていることが悪い事というようなイメージを消費者に過剰に与え、データの収集はよくない事であり、すべての収集内容の公開を事業者に求めるような流れにはしたくない

➡ 規制につながるような方向性となる議論とはしない

AIサービス利用における課題

- 消費者が、製品・サービスに対して完全に依存してしまうと起きる問題があると考えている
- AIはアシスト的な位置付けにあることを消費者に理解してもらいたい。さらに、自分にとって使いやすように育てていくような、そういう感覚を最初に大前提として持って欲しい

➡ AIはアシスト的な位置づけのものであることを消費者に伝える必要がある

- 「完璧ではないAIが、間違いをしてしまうということによって不利益を被る問題」と「その目的どおり、意図どおりに何かを出しているが、その意図が利用者に理解されないが故に起きてしまう問題」を分けて考える必要があると思う
- AIが何を意図していたか、どういう目的で選んだかということを知らせることによって回避できる問題があると思うので、分けて啓発していくことが重要

➡ AIが完璧ではないことを消費者に伝えるとともに、AIの意図・目的を事業者が消費者に伝える必要がある

事業者の望ましい対応

- AIの仕組みそのものを詳しく説明するということは無理だとは思いますが、概要、ロジック、どうしてそうなるのか、どのようなデータでどのようなことになるのかなどは説明できると思う
- サービス単位や製品単位で、「利用の際にはこのようリスクがあります」とか、「このようなサービス品質です」といった説明していくのが、まず一義的に事業者のあるべき姿だと思う
- データ収集に関して、いかに分かりやすく伝えるか、それがどのようなベネフィットがあるかを伝えていく必要がある
- データを取得していることや、どういう情報を利用しているか、蓄積しているかに関して、事業者は常に明確にしておくことが必要である

➡ 事業者は、各種AIの仕組みやロジック、AIがデータを取得している点などについて、情報（AI製品・サービスの利用規約など）を発信することが望まれる
また、消費者は、AIサービス・製品の利用の際は、こういった情報を適切に開示している事業者を選ぶことが必要

消費者への周知内容

- AIを適切あるいは賢く使うことにより、消費者がより幸せに生きることができる
- AIの判断をどう受け入れて、どう賢く使っていくかという、そういうメッセージが必要

➡ AIを賢く使うことで得られることを、メッセージとして発信することが必要

- 「AI」に関し、技術的な知識ではなく、その時点のAIに何ができて、何ができないかという知識について、消費者も含めて認識を合わせていくということが非常に重要である
- 消費者は、理解してないと期待ばかりが大きくなって不満になる可能性があるため、（限界という言葉を使うかどうかは別にして）、AIには限界があることを説明する
- AIはこういう特性があるとか、こういうことに気を付けようみたいな一般化された議論だと、なかなか何も伝わらないまま終わってしまう可能性がある「『AI』をどう賢く使うか」が重要であり、「こうやってやればうまく使える、ただこういうとこに気を付けるといいよ」といったメッセージを、具体例を通じて発信すると良いのではないかと思う

➡ AIの特性、AIができること、できないことを消費者に伝えることが必要
この際、一般化されたものだとして理解されないおそれがあるため、ある程度具体化することが必要

- サービス単位や製品単位で、「利用の際にはこのようリスクがあります」とか、「このようなサービス起こる確率が高いトラブル、起こったときに被害が大きいトラブル、消費者が気付にくいトラブル、そういうものを優先的に取り上げないと、余計な不安を増やしてしまうおそれがある

➡ むやみに注意喚起するのではなく、優先的に取り上げるべき対象を選定して、消費者に伝えることが必要

消費者への周知方法

- 消費者へ情報を届けること自体が非常に難しいので、そこを議論することが望ましい
- 事業者が発信する説明、警告を、消費者がうまく捉えるためにどういう知識を持っていれば、それを読みに行くのかというところについて検討したい
- 「説明が必要」というだけでは駄目で、「何の説明が必要なのか」というところを、お互い（開発者と利用者）の意識合わせというのがものすごく重要である

➡ 消費者への情報の届け方、事業者が発信する情報を消費者が確認するための意識づけの方法の検討が必要